

▶ SDGs 持続可能な未来へ

SDGsの17目標

1 貧困をなくそう 2 飢餓をゼロに 3 すべての人に健康と福祉を 4 質の高い教育をみんなに 5 ジェンダー平等を実現しよう 6 安全な水とトイレを世界中に 7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに 8 働きがいも経済成長も 9 産業と技術革新の基盤をつくろう 10 人や国の不平等をなくそう 11 住み続けられるまちづくりを 12 つくる責任つかう責任 13 気候変動に具体的な対策を 長引くコロナ禍
目標達成足踏み

長崎大熱帯医学研究所教授 山本太郎さん



やまもと・たろう 1964年広島県生まれ。長崎大医学部卒。長崎大と東大で博士。アフリカやハイチで感染症対策に従事し、京大助教授、外務省勤務などを経て2007年から現職。著書に「感染症と文明」「疫病と人類」など。市立札幌病院でも勤務した。

新型コロナウイルス禍では、変わった部分、変わらなかった部分があります。収束後、何を元に戻して何を戻さないかは、今から根源的な部分に踏み込んで議論しておくべきです。例えば、暖房や冷房をかけた電車で窓を開けるのは脱炭素や気候変動対策とは反対方向です。ウィズコロナの時代には感染対策の持続可能性を考える必要がある。コロナ禍で広がったオンライン授業は対面授業の劣化版でな

く、オンラインだからこで、できることを考えれば進歩のきっかけになる。それが持続可能性につながっていきます。コロナ禍でローカリズム(地域主義)とナショナリズム(国家主義)が強まりました。特に感染拡大初期には「みんな平等に」でなく「自分たちだけ」という意識が高まりました。ワクチン分配の不公平も見られました。値段は2倍でもいいからワクチンを買い占める国もあった。もっ

と致死率の高い感染症の世界の流行が起これば、不平等はさらに深刻になるでしょう。かつてエイズの治療薬ができた時は高額で先進国の人が買えない状況がありました。私の所属する熱帯医学研究所はアフリカなどの「顧みられない感染症」を研究しています。患者の所得が低いと薬が高くて売れず製薬企業に開発の動機が働かないからです。私自身、ハイチでエイズ対

明日も生きていくという確信さえ持てない人々にとって、2030年という未来の目標を掲げるSDGsは確かに理想論に映るでしょう。それでも、きれいごとだからと放り投げてしまふのではなく、逆に、それだからこそ、SDGsを私たち人類共通の理念として掲げ続けることが大事だと私は考えています。

「理想論」掲げ続けて

東大名誉教授 山内一也さん



やまのうち・かずや 1931年横浜市生まれ。東大農学部獣医学部畜産学科卒。国立予防衛生研究所(現・国立感染症研究所)室長、東大医科学研究所教授などを歴任。専門はウイルス学。「ウイルスの意味論」「ウイルスの世紀」「ウイルスと人間」など著書多数。

この3年間、私たちは新型コロナウイルスに翻弄(ほんろう)されました。一方でウイルスの側から見ると、ウイルスも人間に翻弄されました。国連の推計によると世界人口は昨年11月、80億人を超えました。宿主となる動物(人間)がこんなにたくさんいて、しかもグローバル化で世界中がつながっている。長い歴史の中で、ウイルスがこれほど一気に地球規模で広がった例はありませんで

抗ウイルス剤やワクチンなど、変異を促す圧力をこれほど広範囲で効果的に受けたのもウイルスにとって初めてです。オミクロン株に変異してもワクチンが開発され、それを回避しようとした変異が起きる。いちごごつこは今後も続くでしょう。変異は自然界でも起きますが、人間が関わると規模と速度が違います。コロナは他のウイルスと比べても非常に巧妙な生存戦略

を持った厄介なウイルスとして知られていました。ただ宿主がいないと存続できないので宿主を殺すような弱毒化し、将来は人間と共存する道を選ぶことになると思います。人間の側も試行錯誤を繰り返す中でウイルスに関する知識を身につけました。政府が今春にも新型コロナウイルスの位置づけを(入院勧告など強い措置が可能)2類相当から(季節性インフルエンザと同等

ウイルスと共存軸に

の5類へ引き下げるのは妥当な判断だと思います。持続可能な対策を取りながら、ウイルスと共存していく方向にかじを切るべきです。同じウイルスでも鳥インフルエンザへの対応はSDGsに完全に反しています。今季、国内の鶏などの殺処分数は1千万羽を超え過去最多となりました。ワクチンで予防できるのにワクチンを使わない(清浄国として貿易上の優位性を保つために殺処分しています。野生の鳥類が毎年ウイルスを運び込む中でのやり方はいつまでも続けられない。持続可能ではありません。アニマルウェルフェア(動物福祉)の観点からも問題です。森林伐採などの自然破壊や地球温暖化がウイルスを人間に近づける要因になったと指摘されています。SDGsの目標3「すべての人に健康と福祉を」は、気候変動対策や生物多様性保全など他の16の目標とも密接につながっています。

14 海の豊かさを
守ろう



15 陸の豊かさも
守ろう



16 平和と公正を
すべての人に



17 パートナリシップで
目標を達成
しよう



<取材後記>

新型コロナウイルスが私たちの前に現れて以来、山内一也さんと山本太郎さんには毎年インタビューしている。そのたびに新たな視点や思考の手がかりをもらう。今回、山内さんの話を聞いて、ウイルスからすれば、人間の世界に引っ張り出されて攻撃され、とんだ迷惑だったのではないかと思った。山本さんの「SDGsはきれいごとかもしれない。だけど、だからこそ大事」という考え方に強く共感した。

教育の不平等悪化／極度の貧困層増加 世界的に打撃大きく

新型コロナウイルス感染症は、私たちの社会にどんな打撃を与えただろうか。

この3年間で国内の総感染者数は3千万人、死者数も6万人を超えている。世界全体で6億6千万人以上の感染と670万人以上の死亡が報告されている。

1世紀前、世界人口の2割が感染し約4千万人が死亡したと推計される「スペイン風邪（インフルエンザ）」以来のパンデミック（世界的大流行）だ。

直接の感染・死亡だけでなく先進国でも医療体制が崩壊寸前となり、途上国ではマラリアやポリオなどの予防接種が計画通りいかなかった。

国連の2022年版SDGs報告書によると、20年には世界の結核による死者数が05年以来初めて増加に転じ、社会的混乱の中で不安症・うつ病の患者が25%増えたという。

健康・医療だけではない。教育面でも「1億4700万人の子どもが対面指導の半分超を受けられず」インターネット環境の有無など「教育における不平等がますます悪化」したと国連の報告書は指摘している。

貧困対策への打撃も深刻だ。世界銀行の推計によると、コロナの影響で20年には1日1・90ドル未満で暮らす「極度の貧困」層が世界全体の9%を超え、約20年ぶりに増加に転じた。

30年を期限とするSDGsの目標達成が「10年遅れる」との懸念も出ている。